

## 犯罪研究の歴史

「**生来性犯罪説**」(1873) チェーザレ・ロンブローゾ (1836-1909) イタリア 犯罪学者

犯罪者には身体上にある種の特徴が見られ、これは人類の初期の動物的生活への退化である隔世遺伝だとした。具体的な犯罪者の特徴として、頭の大きさや耳の形の異常、顔の左右非対称、顎と頬骨の異常な大きさ、目の欠陥や特異性、耳の形の異常など、18の身体的特徴を挙げた。

「**アノミー理論**」 エミール・デュルケム (1854-1917) フランス 社会学者

初期の原始的な社会形態では、その社会の道德意識を共有しない少数者がいることで、集団の成員は優越感を持ち、集団の結束力を高めた。だが社会が発展すると、集団を画一的なルールでは統率できずに、個々人の欲求を個別に調整する必要性が生じる。この調整が不十分な時、人々の欲望が無限に拡大し、伝統的な規範が失われた状態になり、これを「アノミー」と名付けた。アノミー状態では、個人の欲求と、欲求を実現する手段とが不均衡であるために犯罪が起きるとされた。

「**エディプス・コンプレックス**」 S.フロイト(1856～1939) オーストリア 精神医学者

異性の親を求め、同性の親と対抗すること。これを解決することで、現実に対して社会的・道德的に対応できるようになる。

「**精神病質的人格の分類**」 クルト・シュナイダー (1887 - 1967) ドイツ 精神科医

- 意志薄弱な人
- 発揚な人
- 爆発する人
- 自己顕示欲が強い人
- 情性が欠けている人
- 狂信的な人
- 不機嫌になる人
- 自信が持てない人
- 抑うつな人
- 無力な人

「**犯罪の分類**」 エルンスト・ゼーリッヒ (1895～1955) オーストラリア 犯罪学者

- 労働嫌忌からの職業犯罪者
- 抵抗力薄弱からの財産犯罪者
- 攻撃癖からの犯罪者
- 性的抑制欠如からの犯罪者

危機犯罪者  
原始反応犯罪者  
確信犯罪者  
社会的訓練不足からの犯罪者  
混合型

「**体格と気質の関係**」(1921) エルンスト・クレッチマー (1888-1964) ドイツ 精神医学者  
闘士型の人は暴力犯罪を行い、細身型の人は窃盗や詐欺を行うというもの。

「**多元的因子論**」 グリュック夫妻 (1896~?) ポーランド(夫) アメリカ(妻) 犯罪学者  
非行少年と無非行少年との間の差を求め、非行少年の複合的な特徴がある。

「**攻撃の儀式化**」 コンラート・ローレンツ(1903~1989) オーストリア 動物学者  
牙や爪など強力な武器を身に付けている猛獣どうしが闘う時には、一つ間違えば取り返しのつかない結果になる。しかし、そうした結果になることは実際には極めて少ない。それは、敗北のサインという強力な攻撃抑制刺激が働いているためである。戦いの最中に不利と思った側は背走するか、あるいは敗北を表すサインを攻撃側に向けて示す。サインが示された後は攻撃者の行動はほとんど瞬時に停止する。

ローレンツは 1973 年にノーベル賞医学生理学賞を受賞した。

「**遺伝的特徴**」 C.ゴーリング イギリス  
親子や兄弟がともに犯罪者であるという確率が高いことを見出し、犯罪は遺伝的な特性と関連していると結論づけた。さらに、性染色体の Y 成分を多く持つ XYY 型は、攻撃的犯罪者と関連しているとした。

ちなみに 1913 年にロンブローゾの生来性犯罪説を否定している。

「**早幼児期脳障害**」 ラインハルト・レンプ (1923~) ドイツ 児童精神科医

知能は平均で知的障害は無い  
注意集中力が低く、移り気で飽きやすい  
感情が不安定  
衝動的  
刺激に過敏  
対人関係の距離がとれない  
危険に対する恐怖心が欠けている  
学業成績は知能の割に低い

障害による適応不善のうえに思春期の変化と同様が重なって非行に陥ることがある。成人後に

は心身ともに安定するので適応障害が起こりにくくなる。

**「社会的学習理論」** A.バンデューラ(1925～) カナダ 社会心理学者

子どもは罰を受ける行動よりも、報酬を受ける行動を繰り返したり真似をしたりし、禁止された行動をとった者に報酬が与えられると、禁止行動をとる傾向が助長されることがわかった。

**「ストーカーの分類」** 福島章(1936～) 日本 精神科医

イノセント・タイプ

挫折愛タイプ

破婚タイプ

スター・ストーカー

エグゼクティブ・ストーカー

**「親殺しの分類」** 福島章(1936～) 日本 精神科医

葛藤回避型

巣立ちの病型

偏執憎悪型

退縮家族型

暴君殺し型

**「文化伝播論」**(1920年代) クリフォード・ショウとヘンリー・マッケイ

非行地域において、反社会的価値観や犯罪行動が、人から人へと伝播される。

**「分化的接触理論」**(1940年代) E.H.サザーランド アメリカ 犯罪学者

社会は各種の異なる共同体で組織されており、それらは犯罪行為を認める反法集団であったり、逆に犯罪を認めない順法集団であったりというように「分化」している。そして人間は、分化した共同体に接触し、そこから学習することで、犯罪や順法的な行動をとる。

**「自閉症」**(1943) レオ・カナー (1894～1981) アメリカ 児童精神科医

自閉症の60～75%には知的発達の遅れがみられるが、高機能自閉症には知的発達の遅れがない。他人とのかかわりが上手くできない、自分の意思を相手に伝えることができない、興味をもつものが極端に限定されている、同じ動作をくり返し行う等の特徴がある。これらの特徴が3歳までにみられ、他の障害や病気と鑑別されると、自閉症と診断される。

**「アスペルガー症候群」**(1944) ハンス・アスペルガー オーストリア 児童精神科医

コミュニケーションをとることはできるが、会話の内容や質がなんとなくずれていて、違和感がある。人と共感することや人のこころを推測することなどが苦手、その人にしかわからない理論によって行動するのが特徴。

2~3歳まではおおむね正常に発達していく。大人になるまで発見されなかった人も多く、知的レベルの高い人では高学歴であったり、研究者として活躍していたりする。

**「非行下位文化論」**(1955年) A.K.コーヘン アメリカ 社会学者

一般社会の文化や規範は、中流階級の人に有利になっており、下層の人たちはその文化や規範に従う限り、社会的な成功を得る可能性は少ない。その不満が、一般社会の文化に対する拒絶心となり、それと対抗する文化を反動的に作り出し、そうした文化に基づく行動が非行を発生させる。

**「ラベリング理論」**(1960年代) H.S.ベッカー アメリカ 社会学者

逸脱とは人間の行為の性質ではなく、他者によって「規則を犯した」というレッテルを貼られた結果。

**「アイヒマン実験」**(1963) S.ミルグラム(1933~1984) アメリカ 社会心理学者

アイヒマンとはナチスのホロコーストの責任者の名前。

状況によっては、誰でも残虐な行為をなすことを証明した。

**攻撃モデルの学習**(1963) バンデューラ

大人が等身大のプラスチック人形を殴ったり蹴ったりする様子(攻撃モデル)を幼稚園児に見せ、その後、遊んでいる子どもたちからおもちゃを取り上げて欲求不満状態に置き、行動を観察した。攻撃反応の総量は以下のようなものになった。

モデルなし・・・60    非攻撃モデル・・・40    なまのモデル・・・80    録画のモデル・・・90  
アニメ・モデル・・・100

**「文化葛藤理論」**(1973) ソーステン・セリン(1896~1994) アメリカ 犯罪学者

ある人が行為の拠り所とする規範や文化が、同じ行為を犯罪として規制する別の規範や文化と接触・衝突し、葛藤することが、犯罪の原因である。

**「死刑に関する研究」** ソーステン・セリン(1896~1994) アメリカ 犯罪学者

他の事情が同じなら、殺人罪の頻度は死刑廃止州の方が存置州よりも高率である  
殺人罪は死刑が廃止された時は増加し、復活すれば減少する

死刑の執行ないし宣告された直後は、威嚇力が大きいため殺人率は低下する

死刑存置州の警察官は廃止州のそれより安全である

以上の仮説をもとに研究した結果、いずれの仮説も論証されなかった。

**「死刑に関する研究」(セリンの研究に対する反論)**(1975) アイザック・エーリヒ

1人の死刑執行により6、7件の殺人が減少する

**「攻撃性と疾患」**(1976) ローゼンマン

攻撃性の高い人は心疾患で死亡する確率が高い。

**「ルーティン・アクティビティ理論」**(1979) ローレンス・コーエンとマーカス・フェルソン

犯人と被害者の直接接触を伴う身体犯罪が発生するためには、加害者と被害者の移動経路が犯罪に好適な環境で、同じ時間、同じ空間で交錯していなければならない。

**「黄体ホルモンと攻撃性」**(1981) ライニッシュ アメリカ 心理学者

母親が妊娠中に合成黄体ホルモンを与えられた場合、誕生した子どもは攻撃性が高い。

**「割れ窓理論」**(1982) ジェームズ・ウィルソン ジョージ・ケリング アメリカ 犯罪学者

犯罪者は管理されていないと思うと安心して犯罪に着手する。

**「漂流理論」**(1986) デイヴィット・マッツァ アメリカ 社会学者

現代の少年たちは自由に行動し、順法的な生活を前提としつつ、時に反法的な行動をとるといって「漂流」を行っている。

**「合理的選択理論」**(1986) デリク・B・コーニッシュとロナルド・V・クラーク

犯罪は、労力、リスク、利益・報酬に関して、いくつかの選択肢となる行為の中から一つを選択するという合理的な考慮の結果であるとみなす。

**「犯罪と脳の関係」**(1990) ヴォルコフ イギリス

犯罪者の脳には、前頭葉と左側頭葉では脳血流量と糖代謝が低下していた。

**「犯罪と脳の関係」**(1994) エイドリアン・レイン アメリカ

犯罪者の脳には異常が見られる。殺人犯の脳は糖代謝が低下している。

**「犯罪と脳の関係」**(1994) ゴイヤー アメリカ

行動異常の多い犯罪者ほど前頭葉下部の糖代謝が低下していた。

**「社会的絆理論」**(1995) T.ハーシー アメリカ 犯罪学者

人は家族、学校、友人といった社会的集団と結びついている場合、犯罪行動をとることは少ない。

愛着

コミットメント

関与

信念

**「不快感と攻撃性」**

- (1998) アンダーソン
- (1989) バーコピッツとハイマー

アンダーソンは暑さと攻撃性、バーコピッツとハイマーは冷水の嫌悪感と攻撃性について証明した。ただしアンダーソンの研究には疑問点が残っている。

**「暴力番組と攻撃性」**(1994) ヒューズマン

同じ対象者について、9歳、19歳、30歳の時点で攻撃性とTV番組嗜好を調べた。攻撃性は自己評定と他者評定である。9歳時に攻撃的であった少年は19歳時にも攻撃的な傾向があり、9歳の時にTVの暴力場面を好んで見た少年が19歳の時点で攻撃的になりやすいという結果が出た。

**「自己愛と攻撃性」**(1998) ブッシュマンとボーイマイスター

自己愛の強い人は、他の人に比べて、批判されたときの攻撃性の高まりが強い。

**「素人理論」**(1999) エイドリアン・ファーナム イギリス 心理学者

素人は「犯罪者は特有な性格の特徴や身体の特徴を持っている」と考える傾向があると考える傾向にある。科学者の説明にも見られることがある。

**「犯罪の3つの徴候」** マクドナルド アメリカ 精神医学者

動物虐待、火遊び(放火を含む)、高年齢における夜尿症は凶悪事件の徴候。

**「社会的疎外論」** ジェフェリー

人間性の疎外を促進するような社会集団においては、犯罪率が上昇する。

**「犯罪と脳の関係」** ブレイク

犯罪者の脳には、前頭葉、側頭葉に障害、脳波に異常が見られる。

**「排卵期と攻撃性」** フィッシャー カナダ 心理学者

排卵期の女性が、他の女性よりも攻撃的になる。現在は「月経前症候群」として注目されている。

**「分化的同一化理論」** D. グレーザー アメリカ 犯罪研究者

自分の犯罪行為を認めてくれる人や集団に自分自身を「同一化」させる。個人の内面の変化があって、初めて犯罪行動が発生する。

**「殺人の分類」** ハンス・フォン・ヘンティッヒ ドイツ

- 利欲殺人
- 隠蔽殺人
- 葛藤殺人
- 性欲殺人
- 無定形群

また、ヘンティッヒは被害者を学術的に研究し始めた(1948)人物として有名。

**「死刑は犯罪抑止力を持たない」** ファタ カナダ

- 死刑執行数が減少すると殺人が増加するか
- 死刑を廃止した州で殺人が増加したか
- アメリカの死刑廃止州は、それに隣接し、文化程度がよく似た存置州よりも殺人事件が多いか
- アメリカの死刑廃止州では、存置州よりも警察官殺害事件が多いかどうか
- よく知られた殺人犯罪について、死刑執行が、ひろく公表されたのちに、殺人犯が減少しているか

以上の5つについて追跡調査をした結果、抑止力は認められなかった。

**「幼児脳気質中軸症候群」** ゲルニッツ ドイツ 児童精神科医

- 刺激性亢進
- 気分・感情・本能衝動・遺志の不安定
- 注意力・目的行動・知的作業の疲れやすさ
- 自律神経系の興奮性

**「犯罪パターン理論」** ブランティンガム夫妻 アメリカ 犯罪学者

ほとんどの犯罪者は犯行場所を行き当たりばったりで選択しているのではなく、また、被害者が偶然に選ばれたとしても、その偶然の選択は空間的に構造化されている。

### 「ファセット理論」 ルイス・ガットマン

犯罪者の様々な行動に関する変数間の関係を統計的に分析することによって、そこにある構造を見出そうとするもの。イギリスのデヴィット・カンターによってリバプール方式プロファイリングの根幹となった。

### 「情動障害と力動論」 ヒーラーとブロンナー アメリカ 精神医学者

非行歴のある人と、ない人とでは生育歴に違いがある。

### 「テレビの普及と犯罪発生率」 ウィリアムス

それまでTVが映らなかった地域に新しくTVが導入されたとき、その前後で犯罪発生率に変化があるかどうかを比較した。アメリカ、カナダ、南アフリカなどの諸国で殺人事件の発生率は、どの地域においても約2倍増加した。

規模、社会構造、地理的条件などが類似した3つの町を対象に選んで、子どもの身体的、言語的攻撃性を測定した。ある町の子どもたちは他の二つの町よりも顕著に攻撃性が低かったが、これは3つの町のうち唯一TVが見られない地域だった。その町にもTVが導入されたので、その2年後に再度調査を行なったところ、子どもたちの攻撃性は高くなっており、他の二つの町との違いが無くなってしまった。

犯罪の原因は、100年以上前から研究され続けているが、決定打は出ていない。

確実に言えることは、誰も、いい加減なことは言っはいけないし、信じてはいけないということだけである。

### 参考文献

- 岡崎博之（2006）『殺人心理学』、宝島社
- 細江達郎（2002）『犯罪心理学』、ナツメ社
- 福島章（1982）『犯罪心理学入門』、中公新書
- 小宮信夫（2005）『犯罪は「この場所」で起こる』、光文社
- 作田明（2005）『現代殺人論』、PHP新書
- 福島章（2005）『犯罪精神医学入門』、中公新書
- 大淵憲一（2000）『攻撃と暴力』、丸善ライブラリー